

4th

□ 全国へき地教育研究大会
長野大会
・10校の実践報告より

事例①～⑫



事例	学校名	研究主題
① ③	A 野沢温泉村立 野沢温泉小学校	ゆたかな学びを創造する子どもと教師 ～ひと・もの・ことに主体的に働きかけながら、 学び合う学園～
② ③	B 野沢温泉村立 野沢温泉中学校	ゆたかな学びを創造する子どもと教師 ～ひと・もの・ことに主体的に働きかけながら、 学び合う学園～
④	C 長野市立 鬼無里小学校・中学校	かかわりから自己の学び・生き方を決める ～鬼無里で学ぶ 鬼無里に学ぶ～
⑤	D 大町市立 美麻小中学校	協働の学びの質を高める ～9年間の学びによる自律した学習者の育成～
⑥	E 塩尻市辰野町中学校組合立 両小野中学校	ふるさと「たのめの里」を知り、共に愛し、 「たのめの里」に貢献できる生徒の育成
⑦	F 辰野町塩尻市小学校組合立 両小野小学校	ふるさと「たのめの里」に生き、地域と共に 伸びゆく子どもの育成
⑧ ⑨	G 北相木村立 北相木小学校	自然や人と主体的にかかわり、学ぶ喜びを 感じ合える子どもの育成
⑩	H 南牧村立 南牧中学校	自分の考えをもち、高め合う生徒の育成 ～豊かな表現の学びを目指して～
⑪	I 伊那市立 新山小学校	人との関わりを広げたり深めたりする力を 育む指導・支援のあり方
⑫	J 飯田市立 上村小学校	豊かな見方・考え方をもち、学び合い高め合 う子どもを育成する指導・支援はどうあった らよいか

全国へき地教育研究大会長野大会 事例①

小学校	異学年合同の学び	自律した個の学び	遠隔合同の学び
6年	Where's Spot?のお話を作って1年生に読み聞かせよう		野沢温泉村立 野沢温泉小学校

実践スタイル 異学年との交流を目指し、相手意識をもって活動を工夫する取り組み

本時のねらい

Today's Goal:お互いに見合ったり、動画を見直したりして、1年生に楽しんでもらえるように、絵本の読み方を工夫しよう。

Today's Point: ・大事な言葉をはっきり ・相手の顔を見ながら（わからなかったら繰り返す）

主に活用した教材・コンテンツ・ICT 機器等とそのねらい

教材等

- ①英語の絵本 *Where's Spot?*
- ②タブレット端末（録画用）

ねらい

- ①繰り返しの表現からストーリーが理解しやすい。作成する絵本のモデルとする。
- ②録画した自分たちの読み方を、客観的に振り返り、改善点を見つける。

学習者のユニットとその意図

6学年では、異学年の1年生に自作の英語絵本を読み聞かせることを単元の目標とし、「1年生に伝えるように」「1年生が楽しめるように」という、目的や相手意識を大切に外国語活動に取り組んだ。

単元の流れ	主な学習活動	・異学年合同の学び ・自律した個の学び ・遠隔合同の学び	授業時数
<ul style="list-style-type: none"> ・絵本や英語の表現と出会う ・表現に慣れ親しむ ・1年生を意識して内容や伝え方を工夫する ・実際に発表をする 	前置詞の意味や言い方を知り、ゲームなどを通じて慣れ親しむ。	・自立した個の学び	1～2
	<i>Where's Spot?</i> のお話を聞いて、内容や面白さを理解し、動物や場所をアレンジした絵本を作る。	(異学年を意識して)	3～6
	読み聞かせの練習や工夫をする。	(異学年を意識して)	7～9
	1年生に読み聞かせをする。	・異学年合同の学び	10



写真1：自分たちで作った絵本の読み聞かせ方について、グループで話し合う児童



写真2：互いのグループの読み聞かせを聞き合い、読み方について助言し合う児童



写真3：単元の終末で、工夫してきた読み方で1年生に読み聞かせをしている児童

児童生徒の学び（異学年合同の学びによせて）

野沢温泉学園の「英語学習」（こども園の「英語あそび」、小学校の「外国語活動」、中学校の「外国語」の総称）では、幼保小中一貫のカリキュラムがあり、異校種や異学年の子どもたちが合同で学ぶ機会が年間計画に位置付いている。子どもたちは、年間数回、異校種や異学年の子どもとの英語を使った活動に取り組んでいる。

今回の6年生の授業では、単元の終末に「1年生に自作の英語絵本を読み聞かせること」を Lesson Goal として設定した。ALT の読み聞かせをモデルとして提示すると、ALT と同じように自分たちが1年生へ読み聞かせてみたい気持ちや、1年生に絵本を楽しんでほしい気持ちが6年生の中で高まった。

本時ではまず Today's Goal を「1年生に楽しんでもらえるように、読み方を工夫しよう」と設定し、そのためのポイントを出し合った。「話が分からなかったらつまらないよね」「なるべく簡単な英語にしよう」「聞こえないといけないから大きな声でやろう」「反応を見てわからなそうだったらもう一回ゆっくり言う」などの児童の発言をもとに、Today's Point として「大事な言葉をはっきり」「相手の顔を見て」が共有された。

グループで意見交換（写真1）では、実際にやってみながら、ヒントの出し方や、絵を隠してある紙のまくり方などについての練習が主になり、まだ「読み方」の工夫には至っていない姿が多かった。

互いのグループを見てアドバイスをし合う場面（写真2）では、見ていたグループから「絵本のほうばかり見ているよ」「タコの足のところは何て言ってたの？」など、Today's Point に沿った意見が出された。意見をもらったグループは、「脚の数が伝わらなかった。eight はゆっくりはっきり言おう。本番は1年生に聞いてもらおうだし。」「やっぱり顔を見ていないと、伝わったかどうかわからないね」と他のグループからの意見をもとに「読み方」の工夫を具体的にしていく姿が見られた。

授業のねらいを明確にするため、Today's Goal と Today's Point が設定されても、それらが本当に子どもの課題（問い）となるには、やはり実際に英語を使って他者とやり取りをすることが必要である。上記の姿のように、多くの児童は、他のグループからのアドバイスを受けて、初めて「相手」に意識が向き、1年生に楽しんでもらうには、どう読めばいいか、と追究が始まったと考えられる。

活用効果（アセスメント）

評価の観点	Today's Point を観点として、Today's Goal が達成されたか評価する。
具体的変容	Today's Point 「大事な言葉をはっきり」に沿ったアドバイスを受け、「1年生に楽しんでもらえるように」という Today's Goal の達成のため、タコの足の数「three をはっきりゆっくり読もう」と、「読み方」の工夫をする姿が見られた。

実践の手応え（エビデンス）

公開授業の翌週、実際に1年生への読み聞かせを行った場面（写真3）では、6年生が1年生をやさしく思いやりながら絵本の読み聞かせている姿が見られた。何度も練習を繰り返した6年生は、英文はすでにスラスラ言えるようになっているが、早口で一方向的に発表するようなことはなく、しっかりと1年生の笑顔を見て、反応を確認しながら読み聞かせていた。1年生の表情が曇ったときは、ゆっくり、数や場所、動物の名前などを繰り返したり、ジェスチャーで伝えようとしたりしながら、相手に応じた読み方の工夫をすることができた。

全国へき地教育研究大会長野大会 事例②

中学校	異学年合同の学び	自律した個の学び	遠隔合同の学び
3年	ふるさと野沢温泉村の未来		野沢温泉村立 野沢温泉中学校

実践スタイル 村議会議員の方々に来ていただき、村への提案をよりよいものにしよう

本時のねらい

観光、福祉、防災、生活、農業、自然の6つの観点から、野沢温泉村をより良くするための手段を提案する場面で、村議会議員の方々に自分のアイデアを発表し検討することを通して、提案に根拠をもたせるための今後の調査活動について見通しをもつことができる。

主に活用した教材・コンテンツ・ICT 機器等とそのねらい

教材等

プロジェクター、PC、これまでまとめてきた提案のプレゼンテーション
村議会議員4名

ねらい

観光、福祉、防災、生活、農業、自然について、村の課題を伺ってきた村議会議員の方々に来ていただき、自分たちのアイデアを分かりやすく提案できるようにする。

学習者のユニットとその意図

観光、福祉、防災、生活、農業、自然の6つの観点について村の課題を伺いながら、3～4名のグループで、村の課題を共有しながら調査を行うようにした。文化祭でもプレゼンテーションで自分たちの考えを提案し、それを村議会議員の方々にも聞いていただくことにした。

単元の流れ	主な学習活動	・異学年合同の学び ・自律した個の学び ・遠隔合同の学び	授業時数
村の課題について、自分たちのアイデアを提案していこう	議会で議論されている内容や行われている事業を、村議会議員に直接、教えていただく。	地域の方との学び	4
	村の課題について調べたいテーマを絞り込み、役場や村内でのインタビューや調査活動を行う。	地域の方との学び	12
	調査活動をプレゼンテーションにまとめ、文化祭で発表する。	自律した個の学び	4
	再び村議会議員の方々に来ていただき6つの課題に対する提案を発表する。	地域の方との学び	2
	提案を裏付ける内容や根拠を確かにするため、調査等を行う。	自律した個の学び	10



写真1：税収を増やすために、山頂に「テラス」を作ること、「星空ツアー」の実施を提案。



写真2：提案に対して税の収支の説明と、提案に対して参考にしたい、と返答した議員。



写真3：質疑応答や意見交換が続いた後、今後の調査活動の見通しを語る生徒。

児童生徒の学び（地域の型との学びによせて）

本時の1時間では、「観光」「福祉」「生活」の3グループに絞り込んで議員の方に提案を行った。

まず「観光」グループは、村の税収である「自主財源」が3割程度と低いことに着目し、村の現在の財産を活用した「財産収入→夏のスキー場の収入を増やす」アイデアを2つ提案した。1つ目が頂上付近の「上ノ平」に飲食や滞在が可能な「テラス」を作ること、2つ目がそれをさらに活用した「星空ツアー」を実施することである。

議員の方からは税収入や支出の現状、思い切って新しいゴンドラを設置することにしたこととお話いただき、教師はグループを問わず質問がないか生徒に聞いた。すると「テラスを作るスペースはあるか？」と質問が出て、議員からは「ゴンドラ到着駅付近、今はテレビ塔があるところに、村長は360°見渡せるテラスを作りたいと考えているようだ」。さらに生徒から「夏の期間の利用となると、宣伝も必要だと思うが何か考えているか？」と質問が出て、議員からは「竹の子まつりなど、新しいイベントも増えている。他にもいろいろなアイデアがあったら、提案してほしい」とお話をいただいた。

他にも「福祉」グループは、資金調達のための「クラウド・ファンディング」を行うこと、「生活」グループは、村の若者住宅への入居希望が3倍以上の希望があり、希望しても住むことができない人がいることについて、「空き家のリフォームに補助を出す」ことなどを提案した。

議員の方々からは、議員の高齢化問題にも触れ、若い中学生がこうした課題などに関心を持ち、新鮮なアイデアを提案してもらうことはありがたいので、これからも続けてほしい、とお話をいただいた。

活用効果（アセスメント）

評価の観点	自分たちが考えた村の課題への提案について、現状を踏まえて議員と意見交換をする中で、より具体的なアイデアとして練り上げることができたか。
具体的変容	現状を熟知している議員との意見交換の中で、実現するための場所、資金、財産などの現状を確認し、今後の調査活動への見通しと意欲を高めることができた。

実践の手応え（エビデンス）

議員と何度か意見交換したり、提案ができたりしたことは、議員にとっても新たな視点から課題の克服を考えることにもなり、中学生も村に対して自分にできそうなことを主体的に考える意欲を高めることができることにつながったと考えられる。

全国へき地教育研究大会長野大会 事例③

小中学校	異学年合同の学び	自律した個の学び	遠隔合同の学び
小1と小2, 年少と小3 小4～小6と中1～中3	異学年合同授業, 交流活動 R1第2回小中合同集会		野沢温泉村立 野沢温泉小中学校

実践スタイル	異学年との交流活動（ワークショップ, 話し合いなど）
--------	----------------------------

本時のねらい

交流活動を通して、児童、生徒が野沢温泉学園の一員であることを改めて認識し、一つの活動や一つのテーマについて話し合うことで、学園内の子どものつながりを高め、絆を深める。

主に活用した教材・コンテンツ・ICT 機器等とそのねらい

教材等

「リトミック」小1・2合同 「オリジナル夏祭り」小3, 年少合同
「小中合同集会（ペーパータワー, 学園3本柱づくり）」小4～6, 中1～3

ねらい

発達段階に沿った共通の活動を仕組むことで、楽しみながら自然に交流を行い、互いの顔を知ったり、価値観を共有したりすることができる。

学習者のユニットとその意図

小1・2年は、「リトミック」（活動的な音楽教育）を行うことで、好き嫌いや性別、固定的な人間関係とは異なるグループを作成し、主体的に関わる姿勢を培う。

小3は小6になった時に小1として入学してくる「年少」との交流活動を行うことで、「小1ギャップ」の克服をねらいながら、リーダーとして成長していく意欲を培う。

小4～6年は児童会を中心に、中1～中3年は生徒会を中心に活動を行い、異学年との関わりの中で自分のあり方を考え、関わり、行動しようとする姿勢を育む。

単元の流れ	主な学習活動	・異学年合同の学び ・自律した個の学び ・遠隔合同の学び	授業時数
リトミックを楽しもう 小1, 小2	音楽や歌でダンスや表現活動を行い、より多くの生徒と関わる。	異学年合同の学び	1
オリジナル夏祭り 小3, 年少	小3が用意した「射的ゲーム」「魚釣り」などで楽しく交流する。	異学年合同の学び	1
小中合同集会で「学園三本柱」を考えよう	第1回小中合同集会で、昨年の「学園スローガン」を具現化するための「学園三本柱」作成の提案。	異学年合同の学び	1
	第2回小中合同集会で、交流活動をしながらか、「学園として大切にしたいこと」を考える。	異学年合同の学び	1
	第3回小中合同集会で、交流しながら「学園三本柱」を決め出す。	異学年合同の学び	1



写真1：小1，2年「リトミック」を楽しみながら，多くの児童と関わる姿。



写真2：小3がリーダーとなって，年少と楽しみながら，ゲームをして交流する姿。



写真3：小4～小6の小中合同集会で，児童会主催でペーパータワーをして交流する姿。

児童生徒の学び（異学年合同の学びによせて）

小4～6年，中1～3年の「小中合同集会」では，最初に小学校の児童会が中心となって，「ペーパータワー」の活動が行われた。異学年による縦割りグループを作っておき，児童会役員から「紙を折ってもいいが，切ることや接着はしてはいけない」「時間内に，一番高いタワーを作ることができた班が勝ち」などの説明をし，活動に入った。最初は中学生がリードすることが多く，「こう折って積んだら…」と提案することが多かったが，小学生もだんだんと慣れてくると自分のアイデアを提案する姿が見られるようになっていった。

次に中学校の生徒会が中心となって同じグループによって，「学園三本柱」の作成に向けて「学園として私たちが大切にしたいこと」を話し合った。事前にアンケートを配っておき，最初は自分の考えを付箋に書いて模造紙に貼りながら，「ペーパータワー」を行った班の中で発表し合った。その後「学園三本柱」を，こども園の園児にも分かる言葉で考えよう，と生徒会役員から提案があり，班ごとに話し合った。中学生が「知性」と提案すると，小学4年生からは「知性ってなーに？」と素直な反応があり，「勉強のことだよ」と中学生が分かりやすく教えようとする姿が見られた。

交流活動を通して，リードをするリーダーの姿から後輩が学ぶこともあったが，後輩がリーダーの気付かない視点からの指摘をすることもあり，先輩が相手意識をもつことの大切さも学んだり，結果として自分の物事に対する見方や考え方を見つめ直したりする姿も見ることができた。

活用効果（アセスメント）

評価の観点	交流集会や合同集会を通して，普段の学年の枠や関係性などを超えて，より多くの友と主体的に活動に取り組みながら，新たな発想や新たな視点をもつことができたか。
具体的変容	他者の視点で考えることや他者との関わりを行う中で，単に上級生が下級生をリードするだけではなく，自分の見方や考え方を改めて見つめ直す姿も見られた。

実践の手応え（エビデンス）

2時間目は普段の活動の延長として，3つのユニットで活動を行った。こども園から小学校低学年までは，楽しみながら活動したり関わりを増やしたりすることが大切であるが，小学校高学年から中学校は，広い発達段階で共有できる課題設定を教師が適切にすることで，活動を充実させることができ，さらに個々の学びにつながると考えられる。

全国へき地教育研究大会長野大会 事例④

中学校

異学年合同の学び

自律した個の学び

遠隔合同の学び

全校

ふるさと鬼無里の未来を想う 第二章

長野市立

鬼無里中学校

実践スタイル

全校で、地域の大人と共に鬼無里活性化プロジェクトを動かす。

本時のねらい

「旅の駅でのイベント企画」を提案し、内容を練り上げていく場面で、「活性化への貢献」「観光客の立場」「自分たちの学び」の観点から、地域の大人と話し合うことを通して、目的や意義を再確認し、「ふるさと鬼無里の将来」にも思いを寄せながらイベントや活性化への意欲を高めることができる。

主に活用した教材・コンテンツ・ICT 機器等とそのねらい

教材等

「人材」として、「旅の駅」に関係する地域の大人、長野市役所鬼無里支所長、昨年度からかかわりのある埼玉県在住の大人。

ねらい

大人の見方・考え方、生き様にふれることを通して、生徒が自分の見方・考え方を広げたり深めたりすることができるようにする。

学習者のユニットとその意図

中学生が考えた企画を提案し、地域の大人から意見や助言をいただきながら、企画内容を練り上げていく。途中で、「大人も『旅の駅』を将来的に鬼無里の中心にしたいと考えている」「『旅の駅』を『道の駅』にして、より充実させたいと思っている」という大人の思いが吐露され、それを聞いた生徒たちが、目先のイベントだけではなく、「ふるさと鬼無里の将来像」にまで目を向けていく姿をねらう。また、「中学生も大人も『旅の駅』に注目し、期待を寄せている」という「共通する思い」や「地域の大人とのつながり」に気付き、イベントや活性化への意欲をさらに高めていく姿も目指す。

単元の流れ	主な学習活動	・異学年合同の学び	授業時数
「ふるさと鬼無里の未来を想う 第二章」 ・企画内容の検討 ・企画書の作成 ・大人への提案 ・企画内容の練り上げ ・イベントの準備 ・イベント本番	総務・スタンプラリー・ふるまい&体験コーナーの3つの係に分かれ、企画内容を決めだしていく。	・異学年でのかかわりを通した学び	3時間
	企画書を作成し、全体で検討した後、「旅の駅」に関わる地域の大人に提案する。大人から意見や助言をいただき、練り上げる。	・異学年の友や地域の大人とのかかわりを通した学び	2時間
	友と協働してイベントの準備をする。	・異学年でのかかわりを通した学び	6時間
	当日、大人の協力を得ながら、県内外の観光客に向けてPRしたり、インタビューしたりする。	・異学年の友や地域の大人とのかかわりを通した学び	1日



写真1：伊藤さんの話我真剣な表情で耳を傾け、助言をメモするSさん。



写真2：話の流れを踏まえて、自分から質問するSさん。



写真3：自分が獲得した学びを発表するSさん。

生徒の学び

総務係のSさんは、イベントの全体を見渡ししながら、一人一人の動線を考えたり、散策マップの手渡し方（質問内容やPRポイント等）を友と検討したりしてきた。前時を終えた日の生活記録には、「金曜日の話し合いが楽しみです」と綴っていた。本時、Sさんは、企画書を何度も見直ししながら、話を聞くことや助言をメモすることに終始していたが、途中で手を挙げ、「どのくらいのお客さんが来るのですか」と質問した。このSさんの質問がきっかけになって、伊藤さんや久保田さんが次々と意見を述べていった。その中で小野さんからの、「白馬へ抜ける道として通過する人も多い。この通過する人たちをどう取り込むか。取り込むことで鬼無里を知ってもらえる」という話にSさんは何度もうなずいていた。また、伊藤さんが「僕たち大人も『旅の駅』を鬼無里で暮らす人たちの生活の中心的な場所にしたいし、みんなにも生まれ育った鬼無里を誇りに思ってもらいたいという気持ちがある」という話をしたとき、Sさんは真剣な表情でうなずいていた。グループでの話し合いを終えて、教師がSさんに「大人の見方や考え方にふれてどうでしたか」と尋ねると、「来てくれる観光客だけでなく、生活の中で旅の駅を使っている人をどうつかまえていくか」と答えた。Sさんは小野さんや伊藤さんの思いにふれ、「生活の中で旅の駅を使っている人に対して」という見方、「鬼無里の実態をもっと知りたい」という必要感を得たのである。

活用効果（アセスメント）

評価の観点	目的や意義を明確にしなが、大人と話し合いを深め、企画や活性化への意欲を高めることができたか、学習カードの記述や発言、つぶやきから評価する。
具体的変容	Kさんは学習カードに、「地域の人意識から高めていかないと鬼無里の活性化にはならないと思うので、中学生が働きかけて、地域を盛り上げる必要があるのかなと思います。」と記述し、全体の場で発表している。イベントの企画内容を超えて、「将来の鬼無里の活性化」に目を向け、意欲を高めた姿だととらえることができる。

実践の手応え（エビデンス）

大人の見方や考え方、生き様にふれることで、生徒は今まで自分たちにはなかった新しい見方や考え方を獲得する。そして、自分たちの活動や思いが大人に認められることで、さらに意欲が高まる。教師が行う事前の打ち合わせやコーディネートはとても苦勞だが、その分、生徒たちが得られる学びは大きいと実感している。また、大人にとっても「中学生の熱い思いにふれると心が動かされる」とのことで、学校と地域が相互に作用したり、連携したりすることのよさを、確かな手応えとして感じている。

全国へき地教育研究大会長野大会 事例⑤

小学校

異学年合同の学び

自律した個の学び

遠隔合同の学び

6年

協働の学びの質を高める ～自律した学習者の育成～

大町市立

美麻小中学校

実践スタイル

協働して学びを深める授業づくり

本時のねらい

動物の速さを比べる場面で、時間や距離をそろえる操作を通して、どの動物が速いかを比べることができる。

主に活用した教材・コンテンツ・ICT 機器等とそのねらい

教材等

単元の導入から使うマインドマップ(一枚型ポートフォリオ)

ねらい

単元の核心「単位をそろえることで、速さを比べることができる」に迫るために、自己の見方・考え方を自己更新していくツールとして使用する。

学習者のユニットとその意図

単元の入りから、一貫して単元の核心に関わるリフレクションを繰り返し、最初の自分と抜け出る時の自分の見方・考え方の自己更新を図ることで深い学びを図る。

単元の流れ	主な学習活動	・異学年合同の学び ・自律した個の学び ・遠隔合同の学び	授業時数
1 速さについて興味や関心をもつ	「速い」とはどういうことか考える。動物の速さについて、単位をそろえて比べる。	自律した個の学び 友との協働の学び	1
2 速さ・時間・道のりの関係を知り、二要素が分かると残りの一要素を求めることができることが分かる	速さ・道のり・時間のそれぞれの求め方を考え、学びを深める。 マインドマップの再構成をし、見方・考え方を確かなものにする。	↓ 個が自律した見方・考え方の深まり	6
3 速さの問題を解く			1



対話し協働して学ぶ児童たち

児童生徒の学び（協働の学びによせて）

学習場面では、個やグループの課題が明確で、さらに学びたいという意欲的自主的な学びの様子であった。1時間の授業の今日のゴールを明確にすることで、子どもたちは見通しをもって、何を考え、何をするとよいのかが分かり、終末に達成感が持っていたように感じた。

そこには、「分からないから教えて」「分かるようになりたい」「知りたい」と思う気持ちや願いが、自然に出てきて、友だちと協働して解決していこうとする追究する姿があった。そして、子どもたちも安心して学んでいるように思う。

これは、一朝一夕で表れたものでなく、今までに至る5年間の積み上げの上にあると言える。9年間を一貫して柱のように通している本校の教育システムとそれを理解して、授業づくりを進めてきた先生方の業績とも言える。毎年、新任の先生方を迎え、1年ごとに学校は更新されるが、学校のガイドライン(教育の道しるべ)が、ぶれずにそして大切にされてきた表れとも言える。

6年生の姿に、なかなか自分が追究したことを言えない子に、「〇〇したじゃん」「何を聞きたいんだっけ」と優しく聴く友だちの姿もあった。協働の学び、その中に思いやりの心が育っていると感じられた。

いろいろな思考の子がいて、教師は個と個をつなぐ役割をすることに努めた。板書を工夫して、低位生にも視覚的支援を図ったが、ノートの実物投影や電子黒板、タブレットなどのツールを使って、見せ合える支援も必要に感じている。

環境の構成場面では、机の並びは、黒板向きではなく、対話しやすいように向い合せにしている。グループでの対話だけでなく、自然にずっと立ち上がって、他グループのところに聴きに行くことも保障し、思考の活性化を図っている。

このような支援が有効に働き、児童生徒が深い学びに向かっているととらえたい。



活用効果（アセスメント）

評価の観点	マインドマップで可視化された「速さ」の見方・考え方をとらえる。
具体的変容	漠然としていた「速さ」にも基準となる単位があり、そのことから「速い」「遅い」などの比較もできることへの理解が深まる姿が見られた。

実践の手応え（エビデンス）

「速い」と「速さ」との違いについて、比べることを通して確認できた。

1メートルあたり何秒、1秒(単位時間)あたり何メートルと単位をそろえることで、比べられる良さを実感できた。

単位の核心につながる単位の問い(学習問題)を設定したことで、はじめとおわりで自分の考えがどう変わったか、どう学びが深まったかを自覚することができた。

全国へき地教育研究大会長野大会 事例⑤

中学校	やる気	挑戦	自信
全校	夢プロジェクト第11号 「10周年記念！土真ん中ウォーク盛り上げ隊」		塩尻市辰野町中学校組合立 両小野学校
実践スタイル	異学年との意見交換や交流・同一チームで取組		

本時のねらい

土真ん中ウォークで地元の人に来てもらうために私たち両小野中学校生徒会は何をするか考える場面で、取り組みやすさと地元の人に来てくれる可能性の両面から、実行できそうな活動を検討することを通して、互いの意見を尊重しあいながらグループ内で合意形成することができる。

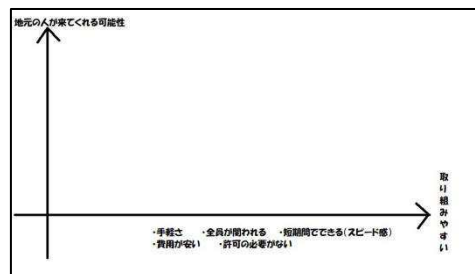
主に活用した教材・コンテンツ・ICT 機器等とそのねらい

教材等

2つの判断軸

ねらい

期間的に短いため地元の人に来てもらうためにはどんな事をすればよいか視覚的に考える



学習者のユニットとその意図

これまでの生徒集会での話し合いを振り返り、どんなことで困っているか出し合おう

- ・朝の生徒集会などでのグループで話し合う時間で、話し合いが活発にならないグループがある。
- ・グループ別の話し合いでうまく話が進まない。

話し合いがしやすいマニュアルを作ろう

- ・小学校の教科書（小学5・6年生）を参考にしよう。
- ・話し合いのテーマと、話し合いで目指す姿は明確にしたほうがいいな。
- ・意見を出してもらうための質問を用意したほうがいいな。
- ・問い返しの質問も用意したほうがいいな。

生徒集会1「地域貢献を見つめ返そう」

- 「これまでの夢プロジェクトの様子をふりかえろう」
 - ・油屋清掃（3月22日）
 - ・記念樹（5月10日）
 - ・小野宿（5月26日）
 - ・青春プレイバック（6月15日）

- 「両小野中学校の生徒会が目指す『地域貢献』とはなんだろうか？」

生徒が決め出した両小野中学校が目指す地域貢献

「地域を盛り上げ活性化させ感謝を伝える活動」

- ・次に予定している夢プロジェクト「土真ん中ウォーク」にこの集会を生かすために、土真ん中ウォークを企画している人たちの思いを聞いてみたいな。（理事会）

理事会



生徒集会（全校）



理事会 「土真ん中ウォークの実行委員会から話を聞く」

- ・私たちが夢プロで植樹している塩嶺の森を広めようとして始まったのだな。
- ・参加人数が減ってきているのが課題なんだな。
- ・実行委員の人たちは、人集めやPRで困っているんだな。
- ・全校のみんなに話を広げて、考えてみよう。

生徒集会2 (問題の発見・確認, 議題の設定)

「夢プロジェクト第11号 『10周年記念!土真ん中ウォーク盛り上げ隊』について」

- ・1年生は、「土真ん中ウォーク」についてあまりよく理解していないから、理事会でプレゼンを行おう。
- ・2・3年生も昨年度の土真ん中ウォークの様子を振り返った方がいいな。
- ・うとうを使ってネットで宣伝できないかな。
- ・小野宿市のときのように、駅前でポケットティッシュを配ったらどうかな?塩尻駅だと人が少ないから松本駅で宣伝したいな。

生徒集会3 (解決に向けての話し合い)

「地元の人に来てもらうための方法をさらに考えよう!」

- ・ハガキを書くのがいいんじゃないかな。
- ・辰野町の有線に流そうよ。
- ・SNSだと来てくれなそうだな。
- ・次の生徒集会でどんな方法になるのか楽しみだ。

生徒集会4 (解決に向けての話し合い)

「土真ん中ウォークを盛り上げ活性化させるために私たち両小野中学校生徒会は何をするか①」

生徒集会5 (解決方法の決定)

「土真ん中ウォークを盛り上げ活性化させるために私たち両小野中学校生徒会は何をするか②」

生徒集会5で決めたことの実践 (決めたことの実践) (10月17日~10月25日)

夢プロジェクト第11号

「10周年記念!土真ん中ウォーク盛り上げ隊」 (10月26日)

理事会 「生徒会引継ぎに向けた今年度の夢プロジェクトの振り返り集会の計画」

生徒集会6 「今年度の夢プロジェクトの振り返り」

理事会

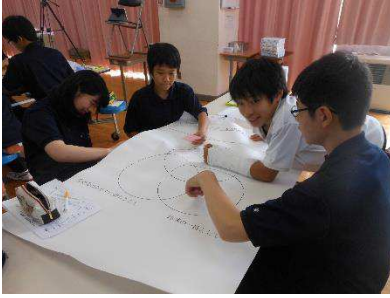


生徒集会(全校)

有志

理事会

全校



生徒集会1「地域貢献を見つめ返そう」の様子



生徒集会4「土真ん中ウォークを盛り上げ活性化させるために私たち両小野中学校生徒会は何をするか①」の様子



日本土真ん中ウォーク当日の様子

生徒の学び

この単元の最初は、グループでの話し合い活動が活発にならずに困ってきた生徒たちが、話し合いの際に困ったら助けになるものが欲しいと考え、自ら「話し合いマニュアル」を作成した。作成の際に、小学校の教科書（小学5・6年生）の国語の教科書を基に考えだした。その時に、思考ツールについて教師側から紹介し考えをまとめる時や新たな考えを生み出したい時に、どんな思考ツールを用いれば良いかを考えた。

生徒集会を重ねることで、「前は、あまり上手に司会が出来ずグループの意見が出なかったが、今回はマニュアルを使いながら進めたので安心してできたし、グループの人が前よりも意見を出してくれた。」や「前はあまり意見が言えなかったが今回は意見が言えたので次回も頑張りたい。」などの生徒の振り返りがあった。生徒集会での形態をグループでの活動を意図的に多くすることで、グループでの司会者の育成とグループ内での生徒の表現力の向上に繋がった。

本時では、話し合いマニュアルを用いることなく自分の力で司会をする生徒の姿があった。また、グループでの話し合いで意見を活発に出せるようになったため、話が脱線しそうなグループもあったが司会がきちんと本来の目的や話し合いのテーマに立ち返らせる姿があった。

活用効果（アセスメント）

評価の観点	地域や社会の課題を見出し、具体的な対策を考え、実践し、地域や社会に参画できるようにすること。
具体的変容	自分の意見を他者に伝えたり、他者の意見を聞いたりして、地域貢献についての話し合いを通して納得して決められたかを振り返りの記述から評価する。

実践の手応え（エビデンス）

日本土真ん中ウォークに向けて、招待状を作り自分達が届けられて来てほしい人に送った。日本土真ん中ウォークに向けて集会を行うことで、生徒達は地域の行事を自分たちのこととして捉え、この両小野をPRするため、日本土真ん中ウォークに多くの人に来てもらうために話し合いを重ね、日本土真ん中ウォークを楽しみにしている生徒も多くいた。さらに、総合的な学習の時間と絡めどしたら当日参加し

てくれる人が楽しめるか本気で追究し、挑戦する姿があった。例年、参加者が 300 名程度だった日本土真ん中ウォークが、今年は 400 名の参加があった。当日申込みの参加の数が 40 名弱であった。参加者の増加と日本土真ん中ウォークまでの実践により、生徒の自信につながった。また、今回の反省点も考えだし次への創意工夫を見せるなど、やる気を表している生徒の姿もある。

全国へき地教育研究大会長野大会 事例⑥

小学校

異学年合同の学び

自律した個の学び

遠隔合同の学び

6年

地域を追究してふるさとについて学ぼう

辰野町塩尻市小学校組合立
両小野小学校

実践スタイル

地域の自然，歴史・文化，人と関わりながら児童が主体的に追究するふるさと学習

本時のねらい

たのめの里で頑張っている方々について調べてきた子どもたちが，自分たちが調べたことをもとに直接取材したり，仕事を体験したりすることを通して，その生き方や思いに寄り添うことができる。

主に活用した教材・コンテンツ・ICT 機器等とそのねらい

教材等

ボランティアさんへの取材の場

取材内容をまとめた紙 個人ファイル（今までの記録）

ねらい

グループごとに，自分たちの興味を持った方について調べられるようにした。

取材内容の発表の際，自分の考えや思いを記録し振り返ることができるようにした。

学習者のユニットとその意図

たのめの里で活躍されている方々の活動やたのめの里への思いを聞いたり考えたりする場面を設け，たのめの里の現状についていろいろな角度から気付けるようにする。さらに，これまで学習したことに加え，新たにたのめの里への思いに気付けるようにしたい。そして，たのめの里の方々が共通して持っている思いを考えることなどから，自己の生き方についても考えていく機会とする。

単元の流れ	主な学習活動	・異学年合同の学び ・自律した個の学び ・遠隔合同の学び	授業時数
現在のたのめの里について考え，話を聞きたい人に取材したり，体験したりすることを通して，自分が地域のためにできることを考える。	たのめの里に対する自分の思いや，家族の考えなどを聞く。	自律した個の学び	2
	現在たのめの里で活躍されている方々の話を聞く。		2
	グループごとに取材したり，甘酒造りを体験したりして，わかったことや感じたことを整理してまとめる。		5
	クラスで紹介し合い，再度活動への思いなどをお聞きして，自分と地域との関わりについて考える。		4



写真1：地域の方にグループごとに取材をしよう。



写真2：取材したことを発表し、聞き合おう。



写真3：昨年育てたお米で作った甘酒でおもてなし。

児童生徒の学び（自律した個の学びによせて）

1学期の学習のまとめとして、たのめの里の昔について地域を巡ったり、地域の歴史に詳しいボランティアさんに質問をしたりして調べ、まとめたことをもとにパンフレットを作った。A児は、そのパンフレットを使って「たのめの里をもっと知ってもらいたい。もっとたのめの里に来てほしい。」と、地域内外に自分たちが学習したことを発信したいという願いを持った。

2学期になって、地域の歴史学習から継続して、地域の現在の様子を意欲的に考えることができた。子どもたちは、地域の良さを再発見し、「たのめの里」を愛する気持ちを高め、さらに地域に貢献したいという思いを持つことにつながった。A児は、授業後の感想で「大人になっても小野から離れず、小野にいたい。」と語った。今地域で活躍する方々の話から、未来の自己の生き方を見つめる姿が見られた。

活用効果（アセスメント）

評価の観点	今地域のために頑張っている人の思いを知り、自分と地域との関わりについて考える。
具体的変容	子どもたちは、今地域のために頑張っている方々の話を聞き、自ら取材し、甘酒を造りそれをお客さんに振る舞うことを体験した。それらを通して、地域の方々の「ふるさとを大事にして、次の世代につなげよう」という思いや、「自分の仕事で地域の人々が喜んでくれている」というやりがいを感じる事ができた。地域社会とつながって生きている自分というものを認識し、自分たちが今地域のためにできることは何か、考えを深めることができた。

実践の手応え（エビデンス）

「たのめの学習」でこれまで地域について学習してきたことの6年間のまとめとして、たくさんの人々が自分たちの地域のために活動されているということを知ることができた。そんな方々の思いについて触れ、考えることで、自分が今から地域のためにどんなことができるのか考えるよい機会になった。実際に持った自分たちの思いを、どう行動に移していくことができるのかが今後の課題である。

全国へき地教育研究大会長野大会 事例⑧

小学校	異学年合同の学び	自律した個の学び	遠隔合同の学び
4年	子どもの「願い」をもとにした外国語活動		北相木村立 北相木小学校

実践スタイル 「願い」をもとに、児童が充実したコミュニケーションを図る外国語活動

本時のねらい

楽しくコミュニケーションをするために「フルーツ・ショッピングゲーム」をする場面で、店員と客の立場を明確にして役割に応じて表現したり、モデルトークの良い例と悪い例を示して良いコミュニケーションの方法を考えたりすることを通して、二往復以上のやり取りをする。

主に活用した教材・コンテンツ・ICT 機器等とそのねらい

教材等

- ①教科書 Let's Try 2 デジタル教材 Let's Chant What do you want?
- ②英単語(果物)フラッシュカード ③果物カード・模擬硬貨 ④ワークシート

ねらい

- ①What do you want? の言い方に慣れ親しむ ②果物の英単語に慣れ親しむ
- ③本当の場面をイメージしてやり取りを行う ④学びを積み重ねる

学習者のユニットとその意図

子どもたちが充実したコミュニケーション活動をすることができるように、子どもの「願い」をもとに「自分だけのフルーツパフェを作る」という Unit Goal を設定し、食材や“What do you want?” の言い方に Chant やゲームを行いながら慣れ親しんだ上で「フルーツ・ショッピングゲーム」を行う。

単元の流れ	主な学習活動	・異学年合同の学び ・自律した個の学び ・遠隔合同の学び	授業時数
1 願いをもとに Unit Goal を明確にする。	・ Lesson Goal に繋がるデモンストレーションを視聴してイメージを持つ。	・ 自律した個の学び	1
2 What do you want? に慣れ親しむ。	・ Chant として“What do you want ~? I want ~.” を行う。	・ 自律した個の学び	3
3 オリジナルパフェを作る。	・ 売り手, 買い手に分かれて, 英語でフルーツ・ショッピングゲームを行う。	・ 自律した個の学び	1
4 お互いのパフェを発表し合う。	・ 作ったパフェを発表し合い, 学習のまとめをする。	・ 自律した個の学び	1



HRT と ALT による
モデルトーク



Let's Chant で “What do you want~?” に慣れ親しむ



売り手・買い手に分かれ
英語でやりとりしながら
果物の売り買いをする

児童生徒の学び（「願い」をもとにした学習における子どもたちの学びによせて）

“Let’s make original parfait～！”と声をかけると、子どもたちは「イエ～イ！」と反応をする。毎時間うれしそうに反応するのは、「自分だけのパフェを作る」という Unit Goal を子どもたちが心から楽しみしているからだ。本時はそのためのお買い物をする時間。自分だけのパフェを作るために、フルーツを買い物する時間だ。

はじめ、HRT と ALT で買い物のデモンストレーションを行った。内容は2パターン。つまらなそうに買う例と楽しそうに買う例だ。Bad point と Good point を子どもに聞くと「楽しそうじゃない。」「目を見ていない。」などすぐに本時に向けた課題が出てきた。そして、今日の買い物では、Loud & Clear・Try & Enjoy/Eye contact/Listen に気をつけていきたいと考えることができた。その後、“Let’s do a shopping～！”の声に元気づく反応した子どもたちは、思い思いのフルーツを買いに行った。

J児は、いつもは元気だが緊張してしまうとうまく話すことのできないことのある子である。店員役の友だちの前で緊張し、うまく言い出せず戸惑っていると、周りの子がそっとやさしく声をかける。その声に「そっか。」とうれしそうに反応すると、安心して買い物を楽しんでいった。

T児は、自分の考えたパフェに強い思いをもっていた。買ってきたフルーツのカードを本物のように扱い、自分のシートに貼っていた。「俺のすげーパフェ。もうちょっとで完成だ。」とうれしそうに次の買い物に向かって行った。

1回目の買い物が終わった時、児童を指名して、参考となる児童のやり取りの Demonstration を行った。子どもたちだけでやる Demonstration は新鮮であり、周りの子も「声ははっきりしている。」「Reaction が素晴らしい」などと、自分の外国語表現をさらによくしていくための課題につなげることができた。

2回目の買い物も終わり、Reflection を書いている時、R児が「次の発表が楽しみ～」とつぶやいていた。「自分だけのパフェを作る」という単元を通した目標がしっかりと据わっていたことの現れではないだろうか。子どもたちの「願い」をもとに単元を構成したことで、子どもたちの意欲は最後まで継続していく、そんなことを学ばせてもらった授業であった。

活用効果（アセスメント）

評価の観点	Listen/Loud & Clear/Try & Enjoy/Eye contact に気をつけて、二往復以上のやりとりをすることができたか。
具体的変容	フルーツカードやお金の模型を使い買い手・売りに分かれたショッピングゲームを行ったこと、Today’s Point (Listen/Loud & Clear/Try & Enjoy/Eye contact) を意識したことにより、買い手は自分の欲しいものをていねいに伝えようとし、売り手は注文内容を正確に聞き取ろうとすることができ、二往復以上のやり取りを楽しんで行うことができた。

実践の手応え（エビデンス）

- ・子どもたちの「願い」に沿った題材設定ができたことで子どもたちの活動意欲が高まり、子どもにとってのめあてや学習活動、Today’s Goal / Today’s Point を児童と一緒に考えた。
- ・モデルとなる対話内容を Chant やゲームを繰り返し慣れ親しんだことで、一人一人の子どもが自信をもって表現できるようになり、英語でのコミュニケーション活動が充実したものとなった。

全国へき地教育研究大会長野大会 事例⑨

小学校	異学年合同の学び	自律した個の学び	遠隔合同の学び
6年	子どもの「願い」をもとにした外国語活動		北相木村立 北相木小学校

実践スタイル	「願い」をもとに、児童が充実したコミュニケーションを図る外国語学習
--------	-----------------------------------

本時のねらい

北相木の好きなところや欲しいもの等について考えをもった子どもたちが、考えを語り合う Group Talk の場面で、教師と児童とで行う Demonstration で活動の見通しをもち、友のやり取りの良さを共有しながら繰り返し Group Talk をすることを通して、相手に伝わっているか確認しながら話したり Reaction を示しながら聞いたりする。

主に活用した教材・コンテンツ・ICT 機器等とそのねらい

教材等

- ①教科書 We Can 2 デジタル教材 Let's Chant What do you like?
- ②北相木村の拡大地図 ③ワークシート

ねらい

- ①What do you like? の言い方に慣れ親しむ
- ②イメージを広げながらコミュニケーションを行う ③学びを積み重ねる

学習者のユニットとその意図

双方向の生きたコミュニケーション活動となるように、子どもの「願い」をもとに「夢の北相木マップを作る」という Unit Goal を設定し、好き・ある、ない・欲しい等の表現に Chant で慣れ親しみ、Reaction や質問の仕方についても確認しながら、北相木村について英語で Group Talk を行う。

単元の流れ	主な学習活動	異学年合同の学び ・自律した個の学び ・遠隔合同の学び	授業時数
1 願いをもとに Unit Goal を明確にする。	・ Lesson Goal に繋がるデモンストレーションを視聴してイメージを持つ。	・ 自律した個の学び	1
2 好き、ある/ない、欲しい等の表現に慣れ親しむ。	・ Chant, 英語モジュールで What do you like? を行う。 ・ Reaction や質問について。	・ 自律した個の学び	4
3 北相木の好きなところ、欲しいものを伝え合う。	・ 北相木村について英語で Group Talk を行う。	・ 自律した個の学び	1
4 夢の北相木マップをつくり伝え合う。	・ 夢の北相木マップをつくり上げ、学習のまとめをする。	・ 自律した個の学び	2



授業ははじめの Small Talk
「家に欲しいものは？」



教師と児童による
Demonstration



『夢の北相木マップ』を
作るための Group Talk

児童生徒の学び（経験の積み重ねを大切にしたい学びによせて）

「英語で日常会話のようなことができるようになりたい」6年生の1学期に子どもたちから出たこの願いを実現すべく、毎時間の授業の冒頭や英語モジュールの中に talk の時間を数多く入れ、英語で伝え合うことへの抵抗を減らしてきた。本時はまず Small Talk として What do you want in your house ? をテーマに教師対教師の talk を視聴させ、その後教師対児童、児童対児童での talk へと移行した。児童対児童の talk になった瞬間、子どもたちはすぐさま “What do you want in your house ?” と話し始めることができた。

Today's Point 共有の場面では、教師対教師の bad model を見せた後、児童の願い「今日は『つながる』会話をしたい」の実現には何が必要かを問うた。児童からは、話し手としては「確認しながら」「gesture を入れて」「繰り返して」「ゆっくり」などに気を付けること、聞き手としては「会話をつなげるヒント (hint to enjoy talking) を使って」「reaction を示して」などに気を付けると出され、児童の言葉で Today's Point を設定することができた。

メインの活動に入る前には、対話の見通しをもつために、教師2名と児童2名での demonstration を行った。demonstration に参加した児童は、はじめは傍らの教師に促されるままに発話していたが、次第に緊張がほぐれ自ら言葉を選んで発話するようになった。demonstration に参加した児童にとっては会話に慣れる場となり、見ていた児童にとっては、友だちが参加したことで、自分ごととしてとらえることのできる場面となった。

メインの Group Talk の1回目。子どもたちは戸惑いながらも、これまでに使ってきた hint to enjoy talking を利用しながら、知っている英単語を最大限活用してやり取りを行っていた。“I want an animal café.” “Why?” “I animal love love.” “I like animal? (教師)” “Yes. I like animal!” など、たどたどしいながらも英語でコミュニケーションをしようとする姿は、本校の目指す「双方向の生きたコミュニケーション」のひとつの形と見ることができた。2回目の group talk の前に、前述のやりとりをした児童の姿を全体の前で紹介し、その良さを共有する場を設けた。すると、「2回目の group talk ではより積極的に発話ができた」と多くの児童が実感し、reflection にもそのことを記していた。

活用効果（アセスメント）

評価の観点	自立した個の学びを土台に、双方向の生きたコミュニケーションとなっていたか。
具体的変容	これまで進んで会話に入っていくことができにくかった児童も hint to enjoy talking を利用して会話に参加することができていた。「質問と答え」で途切れてしまうことが多かった会話がつながるようになり、知っている英語でなんとか話そうとする姿や実感のこもった reaction をする姿が増えた。

実践の手応え（エビデンス）

- ・子どもたちの「願い」に沿った題材設定ができたことで子どもたちの活動意欲が高まり、子どもにとってのめあてや学習活動、Today's Goal/Today's Pointを児童と一緒に考えることができた。
- ・単元のモデルとなる対話の内容をChant や英語モジュールを繰り返し慣れ親しんだことで、一人一人の子どもが自信をもって表現することができるようになり、双方向の生きたコミュニケーション活動が見られるようになった。

全国へき地教育研究大会長野大会 事例⑩

中学校	異学年合同の学び	自律した個の学び	遠隔合同の学び
3年	地域の特色を生かした総合的な学習の時間		南牧村立 南牧中学校

実践スタイル	ふるさと南牧について考え、中学生議会にて提案を行う
--------	---------------------------

本時のねらい

中学生議会で発表する再質問を確かめる場面で、他の班の構想を聞いたり、意見交換をしたりしたことを元に、自分たちの再質問を見返す活動を通して、「南牧を住みやすい村」にするために、よりよい方向を話し合いから再質問を作成することができる。

主に活用した教材・コンテンツ・ICT 機器等とそのねらい

教材等

ワールドカフェ方式（学習形態）
付箋（青，赤，黄），ホワイトボード

ねらい

少人数の前なので発言しやすく、また相手との距離も近く、話を聞いてもらいやすい環境のため、自分の思った意見を言いやすい。また付箋を使用することで賛成なのか、アドバイスがあるのか受け手にわかりやすい。

学習者のユニットとその意図

議会提案を行うにあたりいくつかの班に分かれて構想を考えた。3学年生徒は全体で32人であるが、16人ずつ2クラスに分かれており、多様な考え方に触れる機会が少ない。そこで、学年全員でワールドカフェ方式を取り入れ、それぞれ個人の考え方や意見を出し合い、短時間で共有できるように設定した。

単元の流れ	主な学習活動	異学年合同の学び 自律した個の学び 遠隔合同の学び	授業時数
1 提言案を考える	<ul style="list-style-type: none"> 調査を行い、提言案を作成。 提言案を友と伝え合う。 	自律した個の学び	3
2 提言案を見直し、伝えよう	<ul style="list-style-type: none"> 友との意見交換を受けて、再度提言案を見直す。 提言のための情報収集を行う。 		4
	<ul style="list-style-type: none"> 提言を作成し、村に提出する。 村の回答をふまえて、再質問を検討する。 まとめた資料や提言案を友と伝え合う。 中学生議会にて提案を行う。 		6
3 振り返り、まとめ	<ul style="list-style-type: none"> 地域社会の一員としての生き方を見つめる。 		1



写真1：3学年合同での議会に向けた事前学習の様子。(9月)



写真2：再質問を考えていく場面での意見交換の様子。(本時)



写真3：中学生議会にて、「住みやすい村づくり」について提言を行う様子。(10月)

児童生徒の学び（南牧中学校3年生の学びによせて）

3年間の総合的な学習の時間の集大成として、南牧村の村当局と村議会議員に向けて提案するという相手意識をもってワールドカフェ方式で本時授業を行った。「これからの南牧村の未来」というテーマのもと、村の「産業」について質問を考えた班では、中学生による村のパンフレットの作成について提案した。提案にはスマホを活用したスタンプラリーや季節毎のラリーの提案、特典（景品）・スタンプデザインなどの具体的な内容について、それぞれ他の班の視点から意見交流ができた。

元の班に戻り、意見の再検討をする場面では、農産物や酪農製品の売り上げに貢献できるのではないかと他の班の意見書から、取り入れようとする話合いや、自然環境を活かした観光開発はできないだろうかという意見書から、エコツーリズムの考え方が参考にできるのではないかと議論する姿が見られた。

振り返りの場面では、「自分の班の考え以外にも、他の班と重なるところや、他の班の考えも取り入れて修正なくとはいけないこともあることがわかった」という意見や、「自分の班のことだけでなく、他の班の意見も取り入れて、色々な人にとって住みやすい村になるような提言案に仕上げたい」という、より良い方向性を考えていこうとする姿があった。

活用効果（アセスメント）

評価の観点	他の班の意見を聞いたり、意見交換をしたりしたことを基に、自分たちの意見（再質問書）を見直す活動を取り入れたことは、「住みやすい村」にするためには、様々な視点から物事を考え、多くの人の立場に立ち、よりよい方向性を考えていく必要があることに気づくことができたか。
具体的変容	友の意見を受けたことによって、違う視点から自分たちの意見（再質問）を見直すことができた。

実践の手応え（エビデンス）

地域の特色を生かした総合的な学習の時間として、3年間のつながりを意識した単元を展開した。村に発信していくというゴールを設定し、1年生から学習してきたことは、ふるさとに親しみを持ち、誇りをもって語る姿に表れていた。同時に、少子高齢化や過疎化といった地域の諸問題にも向き合い、地域の一員として村の将来を考えることにつながった。

全国へき地教育研究大会長野大会 事例⑩

小学校	異学年合同の学び	自律した個の学び	遠隔合同の学び
2年	算数の授業で他校と交流しよう		伊那市立 新山小学校

実践スタイル 交流活動の発展としての教科（算数）における遠隔合同の学び

本時のねらい

3桁のたし算ひき算の方法を学んだ子どもたちが、手良小学校2年生とともに、自分たちで考えた穴埋め問題を出し合い、考えた過程を発表し合うことを通して、(2位数) ± (2位数) の筆算の穴埋め問題を解く方法を理解することができる。

主に活用した教材・コンテンツ・ICT 機器等とそのねらい

教材等

ワークシート, 電子黒板, iPad, TV会議システム (Zoom)

ねらい

映像と音声での情報の交換・共有ができる場面を設定し、普段からの交流先である手良小学校の子どもたちと問題を出し合ったり、考えた過程を発表し合ったりさせることで、自分の考えを意欲的に相手に伝えることができるようにする。

学習者のユニットとその意図

交流先である、同じ中学校区の手良小学校の2年生も、12人と手良小学校の中でも少人数なクラスである。これまでも2時間目休みにお互いの近況を報告し合ったり、図工でつくった作品を紹介し合ったりする活動を行ってきており、今後も、同じ課題で図工の作品をつくり、発表し合う場面や、国語の同じ課題のものを共有し合う場面を考えている。

今回の算数の学習では、それぞれの学校で、くり上がりのあるたし算、くり下がりのあるひき算の計算の学習を進めてきたうえで、単元の終末段階で二校合同の学習場面を設定する。特に本時では、□を用いた穴埋め計算を扱う。高度な学習内容となるため、問題によっては解くことが難しいものも出てくる。クラスの仲間とまとまって、協力し合って問題解決に取り組む姿を期待するとともに、手良小学校の子どもたちとの学習を進める中で、さらに多様な考えに触れたり、自分の考えを堂々と相手に伝えたりすることを通して、人との関わりを広げたり深めたりする力をさらに育んでいきたい。

単元の流れ	主な学習活動（単元終末段階）	・異学年合同の学び ・自律した個の学び ・遠隔合同の学び	授業時数
既習の2位数の加減の筆算の仕組みを用いて、くり上がりやくり下がりが2回ある場合の加減の筆算の仕方	(全12時間中第9時) ・筆算の穴埋め問題に挑戦する。	・自律した個の学び →□の数が1つや2つの穴埋め問題を、くり上がり・くり下がりに気をつけて解くことができる。	1
	(全12時間中第10時) ・相手校に解いてもらいたい筆算の穴埋め問題を考える。	・自律した個の学び →穴埋め問題をつくり、それが既習の範囲で計算で	1

を、児童自身に見いだせるようにする。 さらにその発展として、(3位数) - (2位数) で百の位からくり下がりのない筆算を扱い、計算を確実なものにしていく。	・自分たちでも解いていく中で、問題の解き方をまとめる。 (全12時間中第11時)	きるのかどうかを確かめる。	1
	・つくった穴埋め問題を相手校と出し合い、問題の解き方や考え方を共有する。 (全12時間中第12時)	・遠隔合同の学び →穴埋め問題を正しく計算し、その理由を説明することができる。	
	・学習内容をふりかえり、学んだことを自分なりにまとめる。	・自立した個の学び →学習内容をふりかえり、学んだことを自分なりにまとめることができる。	1



写真1：相手校から出された問題を本校児童が解いている。



写真2：本校児童が作った問題を相手校児童が解いている様子を見ている。



写真3：それぞれの問題を解き合った後に、その方法や考え方を共有し合っている。

児童生徒の学び

普段からTV交流していた上、遠隔授業も3回目となり、最初から打ち解けた様子で授業が進んだ。自分の作った問題を相手の学校の友だちが解いてくれるということで、興味をもって解く様子を見ており、学習意欲の高まりを感じた。計算方法の共有では、難しい問題に対して、相手校の児童が「繰り下がりをした後の数字を先に考える」という、本校児童が発表した計算方法を参考にして問題を解いたことを発表した。本校からも「一の位から順に考える」と、明文化していない部分を意識できたという声が上がった。学校・学級によって、注目する点や注意する点は異なってくるため、その部分をお互いに共有できたことは、子どもたちの考えの広がりとなった。何度も計算練習をするだけでは身に付かない、考え方の質を上げる時間となったように思う。

活用効果（アセスメント）

評価の観点	本時の共同追究の場面では、各校のまとめを共有し、より確かなまとめをつくるというところで、遠隔交流をする良さがみられたか。
具体的変容	TV会議システム（Zoom）を活用することで、相手側の問題の解き方から学んだり、自分たちが思ったことを伝えあったりして、新たな視点からより確かなまとめを作っていくことができた。

実践の手応え（エビデンス）

協力し合って問題解決に取り組み、相手校の子どもたちとの学習を進める中で、多様な考え方に触れたり、自分の考えを堂々と相手に伝えたりする場面が多くみられたことから、このような取組は、人との関わりを広げたり深めたりする力を育む上で有効であるといえる。

全国へき地教育研究大会長野大会 事例⑫

小学校	異学年合同の学び	自律した個の学び	遠隔合同の学び
1年	1年算数科 たしざん(2) 2年算数科 かけざん(1)		飯田市立 上村小学校
実践スタイル	複式学年別学習		

学習者のユニットとその意図

1年生5名、2年生3名の複式学級で日々生活をしている。小規模特認校の関係で児童の転出入を考慮し、算数科においては日常的に複式学年別指導に取り組んでいる。

1年生は2年生の学習の姿をいつも間近で見ているため、複式学年別学習の流れにもすぐに慣れることができた。また、学習ガイドをもとに学習リーダーが進めていくため、自分たちで学習を進めていく意識が強く、どうすれば問題を解決できるかを意欲的に考えている。さらに、自分の考えを友だちに伝えるための表現の仕方や書き方を工夫することを通して、学び合いの中で話す力や聞く力の高まりが見られる。また、2年生も1年生の姿から自分たちの課題を考えたり、振り返りから1年生の学習を再確認したりと、互いに良い刺激となっている。

単元のねらい

1年：被加数5以下のたし算の方法を考える場面で、10のまとまりをつかって計算することを通して、加数・被加数のどちらかを分解しても計算できることに気づく。

2年：かけ算の意味を理解し、5、2、3、4の段のかけ算を構成し、九九を唱えたり、それを適用したりできる。

主に活用した教材・コンテンツ・ICT機器等とそのねらい

教材等

- ・フラッシュカード
- ・学習ガイド
- ・学び合いカード
- ・ヒントカード
- ・計算カード
- ・短冊カード
- ・タイマー
- ・タブレット (eライブラリアドバンス)

ねらい

教師が別の学年に直接指導をしているときにも、子どもが自分たちで学習を進めることができる。また、ヒントカードによってつまずきのある児童に対して即座に手立てを与えることができる。

<1年> 単元の流れ	主な学習活動	・異学年合同の学び ・自律した個の学び	授業時数
1 くり上がりのあるたし算の仕方を考える	・10のまとまりをつくることでくり上がりのあるたし算が簡単にできることに気付く。	・異学年合同の学び ・自律した個の学び	6
2 たし算の計算練習	・たし算カードやタブレットを使って計算の練習をする。	・自律した個の学び	4
<2年> 単元の流れ	主な学習活動	・異学年合同の学び ・自律した個の学び	授業時数
1 かけ算の式について理解する	・「何のいくつ分」かを考え、かけ算の意味や式の書き方を知る。 ・「倍」の意味とかけ算について知る。	・異学年合同の学び ・自律した個の学び	4
2 かけ算の九九	・5、2、3、4の段の九九を構成する。 ・九九を使って問題を解く。 ・かけ算の問題をつくる。	・異学年合同の学び ・自律した個の学び	12



複式学年別学習の様子



それぞれの学年のよさを共有し、
学びに生かす



一人一人が意欲的に問題を解決し
ようと取り組む

児童生徒の学び（全国へき地教育研究大会の姿から）

1年A児は本単元で「10のまとまりをつかって10+〇の形にすればよい」と意見が出たときに、どういうことか全くわからずにいた。学び合いの中で友だちが数図ブロックを使った説明を聞くと、「なんで〜なるの?」「これ〇〇さんと似ている」と理解を深める様子が見られた。しかし、いざ自分でさくらんぼ計算に取り掛かると、手が止まってしまった。ところどころ教師のヒントを参考に学習し、時間はかかるが自分の力で計算できるようになって迎えた全国へき地教育研究大会。被加数を分解して10のまとまりをつかって計算できることを学習する本時だったが、教師の予想とは裏腹にA児は数え足しで答えを求めた。大勢の参観者に観られていることもあったのか、今の自分の力で確実に答えを出せる方法を選んだのだ。しかし学び合いの中では小さい数を分解して計算したB児のやり方を「わかりやすい」と話し、8と4のどちらを分解するのがやりやすいか考える場面で「こっち（4）がいい」と発言した。

A児は当初、学び合いの場面で何を話していいかわからずにいた。しかし、2年生が隣で学習している様子を参考にしたり、学び合いカードを活用して学習したりしてきたことで、A児にとって学び合いの場は安心して説明したり質問したりできる場になってきた。本単元後半では、学び合いで友だちの説明を聞いたり、自分で説明したりする中で自信をつけたA児は、自分の力でさくらんぼ計算ができるようになった。

2年C児は入学当初は学年1名だった。単式で学習する際にも複式の進め方を練習し、学び合いは教師の出すキャラクターとの学び合いだった。この学年が今年度は3名になり、友との学び合いを毎日楽しみにしている。

C児は1年時から隣で2年生（現3年生）が九九を唱えるのを聞き、自らも教室に掲示してある九九表を見ながら唱えていたので、すぐに九九を覚えることができた。しかし、かけ算の意味を十分に理解していたわけではないので、かけ算の意味を学習した際には「そういうことか」と嬉しそうな様子が見られた。

全国へき地教育研究大会では、基準量が後に示された問題文から式を考えることで、かけ算の意味理解を深めた。はじめの予想では、3人とも問題文に出てくる数の順番通りに「 4×5 」と立式した。

「一人学び」では考えのもととなる図の描き方で戸惑っていたが「 5×4 」と改めた。学び合いでは、他の2人は「 4×5 」と考え、意見が分かれた。C児はどのように説明すればよいかかわからず、話し合いが止まってしまったので教師から「何個のいくつ分」か考えるように助言すると、3人で「 5×4 」という式を導くことができた。理解を深めるため、もう一問3人で問題を解いた。すると、「3cmの4本分だから 3×4 になる。」と理由を明らかにして説明することができた。「一人学び」では考えに自信が持てずにいたC児だったが、学び合いの中で自分の考えを確かに行うことができた。

活用効果（アセスメント）

評価の観点	学習リーダーを中心に学習を進め、学び合いの中で友との関わりから自身の見方・考え方を深めることができる。
具体的変容	1年生：複式学年別学習では学習の流れがパターン化されているため、次に何をするのか見通しをもって進めており、「一人学び」で必要な道具は自分から机の上に持ってきて使うことができているD児は字を書くことが苦手だが、学習を進めるため、そして学び合いで自分の考えを伝えるために、一生懸命ノートに書く姿が見られた。E児は学び合いの中で友だちの考えを聴き、自分でも説明できるようになるために集中して耳を傾ける姿が見られた。 2年生：F生は転入時から算数に苦手意識を持っており、「一人学び」には不安を感じているため、ついネガティブな発言をしてしまうことがある。しかし、3人で問題を考える場面では自由に発言・質問ができるため、自分の考えを堂々と伝えられるようになった。G生は自分ができないことに大きな不安を感じ、泣き出してしまうこともあるが、友との学び合いの中で、「間違えてもよい」「みんなで考えればよい」と前向きにとらえ、気持ちを切り替えられるようになった。

実践の手応え（エビデンス）

2年生は昨年度から複式学年別指導を始め、今では学習ガイドに沿って進めていくことが当たり前のようにできるようになった。当初は1・2年生には難しいのではという思いもあったが、自分たちで進めていく学習が子どもたちにとっては楽しいようで、非常に意欲的に取り組んでいる。また異学年合同の学びとしての利点もある。例えば授業の最後には、互いの振り返りを聴く場面を適宜つくることで、1年生は2年生の話し方を聞き、どんな話し方をすればよいのかを学んでいる。また、直接関わっているわけではないが、隣で学習する2年生の様子から、学習する姿勢を学んでいる。2年生も1年生の良い姿から学習態度を見直すなど、向上心を持って取り組んでいる。

複式学年別指導の難点でもあり、私の課題でもあるが、二つの学年の学習状況を把握しづらいことがある。自身の授業を見ると、「ここで支援に入れればよかった」「ここでは子どもたちに学び合わせたかった」と反省点が山ほどある。「一人学び」や学び合いで教師の出を少なくし、両学年の状況を把握するために、どこで何をどのように学ばせるのかを明確にし、子どもの学習を支援できるよう研究を重ねたい。